

米欧回覧

第30号
発行
米欧回覧の会
編集
メディア部会

新年懇親全体例会

「アメリカ」テーマで盛会!

平成十五年の新年を寿ぐ懇親例会は、一月二十日(月)の午後六時半より、有楽町にある通称「外人記者クラブ」(日本外国特派員協会)で行われ、日米協会の会長で元駐米大使の大河原良雄氏や駐日アメリカ公使のデビッド・シエア氏らを来賓に迎え、会員、ゲストら約九十名が参加して、盛會裡に繰り上げられた。



新年懇親例会(外国人特派員クラブ)

当会では、本年がベリール航から百五十年に当るので、年間テーマを「アメリカ合衆国」

とすることに決めていたが、その関連行事の第一弾にふさわしい会になった。

なお、岩倉使節団がアメリカ各地で経験したパーティと同様に、スピーチが相継ぎ、またスピーカーもそれぞれに熱が入って長くなったため、ほとんど遊びの部分がなく、まるで「スピーチ例会」だったという声も挙がった。(詳細は二・三頁)

四月十九日の全体例会

高田誠二先生の講演他

次の全体例会は、四月十九日(土)十二時半から日本プレスセンター十階ホールで開催される。会は三部構成で、一部では、新年度に伴う恒例の会務報告があり、二部では、映像「岩倉使節アメリカを往く」を三十分、視聴する。これは従来のスライドをビデオ化したもので初の視聴となる。三部は十四時半から、高田誠二先生の講演「科学技術レポーター久米邦武」と

質疑になる。高田先生は科学技術史がご専門であり、ご承知の通り「維新の科学精神」の著書もあり、北海道大学教授を経て久米美術館の研究員をされ、演題に最も相応しい方である。

なお、その余韻を楽しみ、会員相互の交流を深めるための二次会も予定されている。新しい会員の方はむろんなるべく出席していただきたく、また会員外でも関心のありそうな方は是非誘ってほしい。

『実記』の現代語訳

「パリ」に到着す

『実記』全五巻の英文版が出版されて、「外人」でさえ英語で読めることになったのに、当の日本人が現代語で読めないのはいかにも不都合ではないか」というので、当会で現代語訳に挑戦することになったのは既報の通り。その後、多少の曲折はあったが、結局共同作業は無理だとわかって、博覧強記の水澤周氏が単独で訳業にチャレンジすることになった。その仕事の水澤氏の類い希な熱意と尽力によって急ピッチで進み、昨年中に「米国編」「英国編」を終え、すでに新春「麗都パリ」に入ったと聞く。そこで水澤氏にその中間報告をお願いした。題して「久米邦武と二人旅」。

(詳細は四・五頁)

最近、アメリカに関する二つの映画を見た。一つは最新作の「ギャング・オブ・ニューヨーク」、一つは懐かしい往年の名作「西部開拓史」である。いずれもアメリカという社会の本質を衝いているところがあって極めて興味深かった。移民、開拓者精神、自己責任、暴力、金、女性パワー、そしてキリスト教、そのいずれもがこの「荒っぽい国」

誕生のキープクターになっていくという実感である。

久米邦武は、千八百七十年代のアメリカをみて『実記』にこう書いた。

世界を挙げて、己の国是に就かしめんとす

泉 三郎

「米国ハ、欧州人民ノ開墾地ナリ、欧州ニテ自主ノ精神ニ逞シキ人、己カ不羈独立ノ智力ヲノベ、新ニ一大生業ヲ興サント志セハ、其游刃余リアル、米国ノ広土(今や、世界と宇宙の広土とも読める)ニ向ヒテ、開墾ヲ試ム」

いこみ、単純にその正義のために戦う。そして世界もそれに従うのが当然と考える単純さである。そこで久米のコメントがまた想起される。「米国ノ民ハ、此政中(共和制)ニ化育セラレ、百年ニ垂レタレハ、三尺ノ童モ亦君主ヲ奉スルヲ恥ツ、習慣常ヲナシ、其弊ヲ知ラサルノミナラス、只其美ヲ愛シ、世界ヲ挙ケテ、己ノ国是ニ就シメントス、造次(とつさの間)ノ談ニモ、其感触ヲソナフ、到底其意思ノ移スヘカラス、純平タル共和国ノ生靈ナリ」物事にはすべて「一得一失」があるのに、自国のイデオロギーが正しいと信じて、世界を挙げてこれを広めようとする。いくら反論しても聞き入れようとしない。米国の弊に、衆愚政治、金権政治、そして単純さがある、と久米は指摘する。こうしてみるとアメリカはその後百三十年経っても本質は余り変わっていないようだ。久米の『米欧回覧実記』が、いま見てもなお新しく示唆に富む所以である。

第27回 全体例会

二〇〇三年一月二十日(月)

外国人記者クラブにて

新春懇親例会盛會

新年懇親例会は、岩倉使節団訪米時にまつわる音楽(BGM)の流れの中、本会特製のウエルカムドリント「ボンケ」で迎えられ、なかなか雰囲気の中で始まった。

冒頭、恒例になった「米欧回覧実記」の朗読、ソルトレークシティでの「新年祝賀」の一節が浅沼晴男氏により高らかに朗読された。次いで藤原宣夫氏の司会、泉三郎代表の挨拶、来賓スピーチが続き、岩倉大使の五代目に当たる岩倉具房氏(具忠氏の実弟)によって乾杯の音頭がとられた。

そしてしばらく歓談のあと、数人の方からそれぞれ興味あるスピーチがあった。中でもゲストとしてお招きした山尾信一氏は、伊藤博文の盟友で岩倉使節団外遊中の工部省のボスだった山尾庸三の孫にあたり、八十歳をこえて矍鑠として情熱のこもったスピーチをされた。

大河原氏スピーチ要約



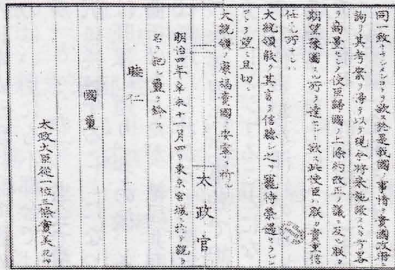
大河原良雄氏 日米協会会長・元駐米大使

本会に出席してみても本当にすばらしい会をお考えになったと改めて感銘を深くしております。太政大臣の三条実美が送別

会をし、その際にこの日本のわが国運がこの一挙にあるという趣旨のことを述べています。そのミッシェンの意味合いがよく出ておりますので、岩倉ミッシェンに対する明治天皇の信任状をここで引用します。(朗読) アメリカとの交流が百五十年前に始まったわけですが、私はむしろ翌年の一八五四年に神奈川で結ばれた日米和親条約、つまり日本とアメリカとの正式の交流が始まったその時期が、非常に大事な意味を持っていると考えています。



「ボンケ」を手に乾杯の音頭をとる岩倉具房氏



大河原氏が引用した明治天皇の信任状のコピー

今年には、浦賀、神奈川、下田、函館など色々な都市が百五十年の歴史をたどる事業を計画していますが、私も日米協会でも、日米関係がきわめて重要な時期だけに、その重要性を国を挙げて考える縁にできればと考えています。

米欧回覧の会の皆さんが、本年のテーマをアメリカとして日米関係を考えていこうとしていること、是非この機会に、日米関係の百五十年を思い返し、また、岩倉ミッシェンがこれだけの大事業をしてこられたという歴史をもう一回よく思い出し、日本の将来をますます立派なものに、力強いも

◆泉代表のあいさつから

岩倉使節団のアメリカ最後の地ボストンでの岩倉大使のスピーチを少し乱暴な表現ですが紹介します。「ペリー提督が来てむりや扉をこじ開けられたときはほとほと困った。しかし、国を開いて十八年交際をして、今回またこうしてアメリカを实地に旅して、文明社会の実態を見聞し、貴国の人たちの懇切な歓待を受けてみると、ああ国を開いて良かったと今では思っています。ペリー提督の強引な仕打ちに今では感謝しています」主意はそんなことだったと思います。

しかも、それが決して外交辞令でないことは、「実記」米国編の最後に、久米がこう書いていることから分ります。「米国ノ人ハ、外国人ヲ視ル

のにしていくようにお互いの力を揃えていければとの思いを深くしています。



歓談するお二人の米国外務省公使



司会の浅沼会員(左)と藤原会員

一家ノ如ク、厚誼ニ厚キコト、同胞ニ於ルカ如シ」ところがそれに比べ、日本人は頑なに国を閉ざして無礼にも交際を拒み続けたことはまことに恥ずかしい、そのころのことを思い出すと冷や汗が流れ落ちるようだと続き、「嗚呼此開明ノ際ニ当リ、鎖国ノ宿夢ヲ醒シ、世界交際ノ和氣ニ浴センコト、我日本ニアリテハ、皆人喫緊ニ心ニ銘セサルベカラサルナリ、」と結んでいます。現実の社会では弱肉強食や闘争主義が幅をきかせていて、一方で「世界交際ノ和氣」をひしひしと実感できたわけです。

今日でも、「悪の枢軸」だとか「悪魔の帝国」だとか言いあつてますが、二十世紀はぜひとも「世界交際の和氣」でいつてほしいものであります。

米国公使スピーチ要約



デビット・B・シエア氏
米国大使館政務担当公使

江戸後期から明治初期の人々の驚きと苦勞は今では想像もつかないものだったでしょうが、同時にそれは胸躍る経験だったに違いありません。ペリー提督の来航から百五十年の間、日米関係には山あり谷あり、さまざまな出来事がありました。結果として今日のような強固な友好関係を築き上げることができたことを岩倉使節団に参加した我々の先輩たちもきっと喜んでくれていると思います。かくいう私は、下田での日米和親条約締結の日からちょうど百年後の一九五四年五月二十五日に生まれました。そして、二十歳の時、早稲田大学の留学生として一年間を過ごし、国務省に入ってから今は今回が四度目の日本赴任になります。ちょうど日米和親条約が両国の友情の歴史の幕開けとなったように、私の日本留学は今日まで続く私と日本との深い関係の始まりとなったのです。

現在は、政務担当公使として日々われわれが直面する共通の政治的、外交的、軍事的課題について日本政府と意見調整し、交渉する一方、日本の政策決定プロセスをよりよく知るために国内政治を注意深く見守っています。

通商と文化の交流からはじまった私たちの関係も今日では外交、人道援助などそれ以外の分野に広がり、そのパートナーシップは世界にとって

使節団や米国に関係が深い方々の興味深いスピーチに聞き入る

「子孫のスピーチ」



久野明子氏(会員)
日米協会・専務理事

自分の人生というのはいかに目に見えない運命の糸みたいなものに操られているのだなと感じます。私にとって、それは岩倉使節団であり山川捨松であったのではないかと思えます。津田梅子以外の女子留学生は国費を無駄遣い、特に大山捨

ますます重要になってきています。われわれ両国は政治的、経済的利害を共有しているだけでなく、自由や民主主義といった共通の価値観で結ばれ、二国間で、地域で、あるいは国際機関の場で協力しています。新しい年も日米関係にとって実り多く両国がさまざまな局面で協力し、この地域と世界の平和と安定に貢献できることを願っております。

興味深いスピーチに聞き入る

松にいたっては、夜な夜な鹿鳴館でダンスをしてうつつを抜かしていたというような記事を読んで、私は子孫(ひ孫)としてすぐは恥ずかしい思いをしておりました。

捨松は女子教育の為に貢献したいという大きな夢をもって帰国しましたが、二十二歳でもうオールドミス、当時の社会は未婚女性を一人前に扱ってくれないということを感じたのです。そこにタイミングよくプロポーズしたのが十八歳年上の大山巖だったのです。

そういうことがわかって「鹿鳴館の貴婦人・大山捨松」という本を、岩倉使節団そして女子留学生というご縁で一冊書く

ことができました。その時、この米欧回覧実記の単行本をハンドバックに忍ばせて、岩倉使節団が行った都市を訪問して、調査いたしました。ですから、そういった本が書けたのも岩倉使節団のおかげだと思っています。

私は日米協会の専務理事をお受けしましたが、なんと初代の会長が岩倉使節団の留学生の一人として十六歳でアメリカに渡った金子堅太郎と知り、運命の糸を感じると同時に緊張感と責任感で新しい仕事を始めたのを覚えております。

ゲストのスピーチ



山尾信一氏
日英文化記念クラブ会長

山尾庸三というの私の祖父にあたり、三条美美、徳川慶喜と同じ一八三七年生まれです。あまり知られておりませんが、伊藤博文、井上馨、遠藤謹助(大阪造幣局長)、井上勝(鉄道局)とともに幕末の英国留学長州五人組の一人です。帰国後、物作りのエンジニアを養成

する学校(後の東大工学部)を作り、感性をみがく美術学校(後の芸大)を作り、目や耳の不自由な方の学校も作りました。

天皇陛下がアメリカの「サイエンス」にお書きになっている論文(平成三年)に「近代に貢献した人が二人いる。一人は福沢諭吉、もう一人はエンジニアづくりをした山尾庸三である」という大変ありがたいお言葉を頂きました。

幸いなことに日本は感性を大切にしている文化であり、その大和文化によって日本全体の統合を企てたのが吉田松陰です。全ての大和魂、大いなる和は物を作る基本です。

私は終戦後、一時期進駐軍でジャズピアノをやっておりました。スターダスト、インザムード・・・、聴いたらいまでも夢中になります。そういう柔らかな物が作る上で大事であることを教わったアメリカに私は感謝しております。

今年(平成十五年)、「とうご」、これは統一とは違って色々な異なった味を全部総合することにひとつ一つでは得られないものすごい力を発揮するということなんです。この統合が世界に広がって本当の意味で、それぞれの持ち味を生かした統合の大和の実現、吉田松陰の夢開く時であってほしいと願っています。

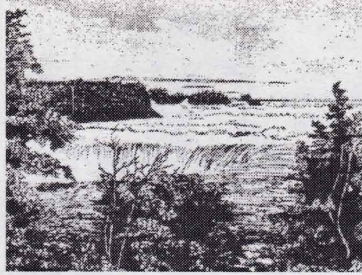


『米欧回覧実記』を現代語にしてみても 久米邦武との二人旅

水澤周(会員)



昨年四月頃スタートした『米欧回覧実記』現代語訳は、二月はじめにパリ入りを果たした。約九か月でアメリカ、イギリスの旅を終えたのだから使節団の実際の旅よりほんの少し早い。プロシヤから先は使節団の歩調もやや早くなるから、次第に追いつかれるだろうと思うし、訳了は「全一年九ヶ月二十一日」の日程よりはいくらか延びるかも知れないが、まあそこそこ同一歩調となるであろう。



「ナイアガラ」ノ瀑布ヲ回覧ス
(『実記』第1編第15巻)

だったと痛感している。サンフランシスコから広漠たる西部・中西部の旅の後に東部のアメリカ文明に触れ、幾つかの近代産業を見る。このウォーミングアップなしに使節団が直接産業革命と資本主義の総本山イギリスに行き、目眩くような大工業のただなかに放り込まれたとしたらどうだったであろう。おそらく見せられたものの大部分はチンプンカンプンだったのではないか。

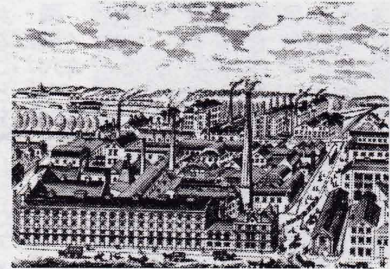
はスコットランドのハイランド散策。四冊目ではナポリの、そして五冊目ではスイスの風光の旅が、おや、三冊目はどうした？ご安心下さい、ここではちゃんとパリの都市美観光がスケジュールに組まれているのである。

ベルトコンベアはどう動く

それにしても、イギリスではいささか疲れた。なにしろ政治・経済機構から始めて、軍港や兵器工場、港湾荷役、造船、製鉄、製鋼、非鉄金属、製機、ガラス、ゴム、窯業、染色、綿紡織、毛紡織、製紙、食器、刃物、製塩、ガス製造、醸造、製糖、製菓、はてはボタンやペン先製造等々、いったい幾つ工場を回つたらう。まことに「荷物をホテルで解いたとたんに視察が始まり、機械の響きや蒸気の噴出するただなか、鉄の匂いや煤煙のたちこめるさなかなを走り回る。煤塵を満身に浴びて暮れ方に部屋に帰ると、服の塵を払うまもなく宴会の時間が迫っている。重い疲労を感じながら真夜中にベッドに入り、目を覚まして見れば、すでに工場の人が迎えに来ている」という具合なのだ。

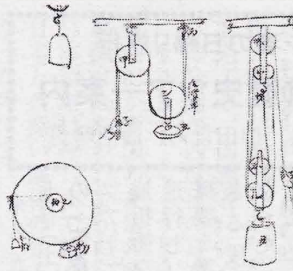
久米さんの造語の才

現代語訳を行うにあたって、テクニカルターム、とまでは行かないまでも特別な用語の解釈にはなかなか難しいものがあつた。例えば製鉄のところでは「生鉄」「熟鉄」という言葉が出て来る。この「生鉄」の方はどうやら今日の銑鉄であることがすぐ分かる。しかし「熟鉄」の方は「粗鋼」であるのか「可



ウーリッチのビスケット工場を視察
(『銅版画集』)

鍛鉄」であるのか「錬鉄」であるのか。そのいずれにも使っているようでもある。「鑿注」という言葉が出て来る。これを漢和辞典で見ても熟語としては出て来ない。「鑿」の一字としては出て来て、「メッキ、鑄掛け」のことだと。文章としては、鑄鋼を作る工程だから、こんなところにメッキが出て来たり、鑄掛けのようなセコイ言葉が出てくるのはおかしい。そこで字の上の部分の「沃」だけを引くと、注ぎかけるという意味が出て来る。はあ、これだ。字の下部の「金」というところに、久米は溶解した金属を意識しているのである。つまりこれは、溶けた金属(この場合は溶解した鋼)を注ぎ込むという意味、久米の造語なのである。それにしても上手なものだ。久米さんは漢字に強いだけに、それを古典的なままで使うだ



邦武が表記に奮闘した滑車の図
(手稿「物理学」久米美術館所蔵)

けでなく、独自の意味を加えて使用することもままあるのである。

ビール年間消費量二CC?

久米邦武の父親は息子に算術の大切さを教えたと言う。これからの武士、為政者はその感覚がなければだめだ、というのである。そのせいかもしれないが、『実記』には実によく数字が出て来る。しかし、不思議なことにその多くに間違いが：単純計算の間違いが出て来る。どういうわけだろう。

この間違いにまず気が付いたのは、最初の太平洋横断の旅の日数と距離だが、以来、数字が出て来るたびに、注意することにした。訳者としては現代の人々に簡単に理解していただくように、おおむねメートル法で統一したから、数字が出るたびに検算し、かつ換算する。だからいっそう間違いも手に入るように分かるし、また、間違えた理由も、だいたい推察できるのである。

ひとつにはこれは、各国が使用している単位がまことに複雑なせいもあって、ヤード・ポンド法はもちろんだが、ウエイとかセントネルなどと言った古風な単位まで話に登場して来るのだから、厄介である。数字の修正をするたびになんだか久米邦武先生の小心な秘書にでもなったような気持ちでした。

それにしても、久米先生はミシシッピ川の水深が一六〇〇メートルあるとか、イギリス人一人当たりの年間ビール消費量二CC(と計算できるような)などほとんどない数字をどこからか持って来たりするので、秘書としては面食らうのであります。

また、久米さんは方角にも少し弱い。南と西を取り違えた時、時には南と北を取り違えた地図が入っているのはアメリカ篇のごく最初の方だけですが、旅行中どんな地図を使っていたのか、そのあたりは知りたいたことの一つである。

美文で書き落とすこと

『実記』の文体は漢文訓読体である。つまり本質は漢文であり、漢文としてのさまざまな特徴がとことん付きまとう。その一つが、美文調になったとき(たとえば美しい景色の描写など)、とかく対句や古典的麗句を使ったがるということである。

ある。これが漢文としては、まことによろしいのだが、現代語にすると、なんとなく妙な感じも漂って来る。

動物園の光景で、「ライオンや虎・豹の咆哮は森の木々を震わし、鷲や鷹、隼の叫び声は青空に凜然と響く」とか、「池の中ではカバが波を蹴立てて走り、草原ではダチョウウが埃を巻き上げながら走っている」などと対を取るのには、まあ愛嬌というやうなものであるが、これが東西南北論のサワリなどで、勢いよく使われるとなると、問題がないわけではない。

つまり対句を取り、対比を明確にすることによって論理は鋭角的になるのだが、同時にいささか単純化もされる。直截的な力強さを出そうとすればするだけ、微妙な問題、例外的なことなどは欠落しがちなのである。さらに、比較文明というように複雑な問題を扱うにしても、当時、語彙がまだ不足していたという問題もある。

言葉は思想の入れ物であり、思想を語る道具である。中国の古典的な語彙で西欧的思想を語り、かつ、微妙な比較を行うことはなかなか難しい。漢文訓読体という思想の入れ物、道具を使えば、やはりそれ独特の思想の料理の仕方、盛り付けしか出来ない。いや、出来ないとは言わない、久米はたしかに必死で西欧文化の実態に肉薄しようとしていたのである。しかし、いかにもやりにくかったであろうという気がする。そして、対句による対比を鮮明にすればたしかに名文にはなるが、きわめて複雑な人文的諸現象を、対比だけで表現できるものではなく、その結果微妙なところは捨棄することにもなりかねない。伝えられるところには、ある種のバイヤスがからまないとも限らないのである。

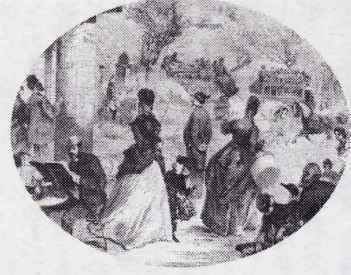
そういう、思想の言葉としての問題も、『実記』はふんだんに提供してくれているということも、このくだりでは言いたかった。

巴黎は愉悅の町

産業革命の理解について、いろいろな試行錯誤をしながら(そしてその訳においても試行錯誤をしながら)やっとパリについて、久米先生もその秘書役たる訳者も少しはつととしたところだが、久米が描くそのパリの町は、こんな風である。

「パリの市内にはいたるところに酒場、レストラン、カフェがある。木陰にテーブルや椅子を並べ、客がのんびりとむかい合ってワイングラスを傾けている。真夏にはここで涼をとる、晴れた夕べにはここで月を愛でるのである。劇場やミュージックホールも方々にあり、人々は一日中歌い、踊って、憂いのようなものはない」

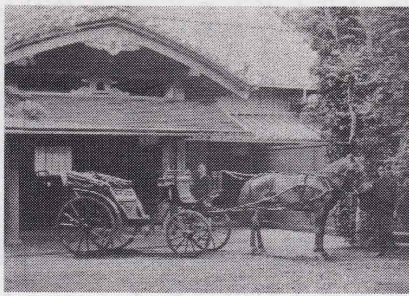
ファン・ド・シエクルにはまだ



1872年のパリ
(「写真・絵図で甦る堂々たる日本人」)

少し間があるが、ここにはヴェルレーヌやランボオなどが耽溺したパリがある。パリの町の舗装も独特で、ロンドンのように馬車の車輪の轟音が聞えない。ただ馬の蹄の音が憂々と聞こえるだけである。モンテ・クリスト伯爵の馬車が登場しそうだが、まことにパリは全市民がひとつの公園内に住んでいるような町であって、人を楽しませてくれる町である(「巴黎ニアレハ、人ヲシテ愉悦セシム」)。

ただ、残念なことは、一行のパリ滞在が冬の最中だったことだ。テラスで憩う客たちも着膨れていたかもしれない。これが初夏のパリだったら、どんなにかよかったろう。あのものがたい久米先生も、「ああ皇月フランスの野は火の色す君も雛罌粟(コクリコ)われも雛罌粟」くらいのことは、つい口走ってしまったかもしれないのである。



旧堀田邸玄関前(「下総佐倉堀田家文書」)

会費は五千円(バス代、施設入館料、昼食代込み)。申込み方法は追って送付の案内の返信がききに記入・返送。国立歴史民俗博物館のある佐倉城址公園や旧堀田邸のさくら庭園は素晴らしい眺めの散策コースとなっている。五月の

来る五月十七日(土)開催の「佐倉歴史ツアー」の現地折衝などが進行し、実施概要を案内で改めた。ここに改めて多数の会員の参加をお誘いする。同時に、家族、友人の方々にも声をかけていただきたい。

当会恒例・春の日帰り旅行 五月の佐倉歴史ツアー案内

国際交流部会 山田哲司、浅沼晴男

佐倉の気候のもと、十分に楽しんで頂きたい。
昼食はうな重、柳川鍋か松花堂のいずれかをチョイスできる。おみやげは最中など佐倉の銘菓がおすすすめ。

●「佐倉歴史ツアー」スケジュール・5月17日(土)

- 09:00 東京駅八重洲口・八重洲富士屋ホテル前より貸切バス・富士急行にて出発
- 10:30 佐倉市着、国立歴史民俗博物館見学
佐倉城址公園散策
- 12:30 和風レストラン 菖蒲荘にて昼食
- 13:45 堀田家墓着、見学
- 14:30 旧堀田邸着、見学
- 16:00 佐倉順天堂記念館着、見学
- 16:30 佐倉発
- 18:00 東京駅前着、解散

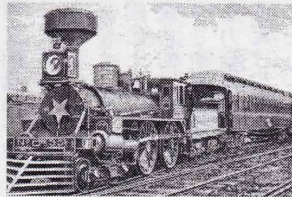
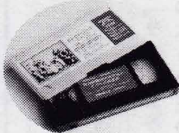
■九月の「アメリカ岩倉使節ツアー」予告

岩倉使節の足跡を辿るアメリカツアーの企画は、多彩な目玉を織り込んでおおむね以下のスケジュールで現在詰めに入っている。参加希望の方はあらかじめ予定をして頂きたい。出発は九月下旬、九泊十日程度の企画を検討中である。現在のところ、最初の上陸地サンフランシスコ(二泊)、大陸横断鉄道(車中一泊)でソルトレー

■記録ビデオ改定版

国際シンポジウムの記録ビデオが、足立会員の奮闘によって、十八分と二十九分の改定版に短縮され、使いやすくなった。

特に、十八分は国際シンポジウムおよび当会のPRに最適。問い合わせは事務局まで。



当時の蒸気機関車(上)
岩倉使節団の米国旅程(右)

【写真・絵図で魅える堂々たる日本人】より



クシテイへ(二泊)、ワシントン(二泊)そしてニューヨーク(二泊)を予定している。

実記を読む会の現況

連絡 クラウンインターチェンジ

Tel 03-5469-2090 Fax 03-5469-2093
info@crown-interchange.com

■第五十九回 例会報告

一月九日、三十名が出席。今回は、実記第一編第六卷「ネバタ州およびユタ部の記」にある「ソルトレーク」の所を会員が音読し、水沢氏が現代語に訳して朗読。



第59回例会参加の会員の方々(新年会)

■第六十回例会報告

二月六日の「読む会」は、第一編第七卷「ロッキーマン山鉄道の記」から第九卷「シカゴよりワシントン府鉄道の記」の中で、久米邦武が考察・見解を述べている箇所をいくつか採り上げて音読し、例によって水沢氏がその箇所を現代語に訳した。最初は「国の発展に関する東西比較」、次に「トーマス・モロコシ」最後は「車窓からの風景の観察」。久米の考察・見解について出席者から活発な意見が出され充実した「読む会」になった。

このあと室賀脩氏から、先般の研究発表「実記に関する鉄」について追加報告があり、実記の中で述べられている「金の採鉱法・精製」などを採り上げ詳しい解説を加えられた。また、「住友家と南蛮吹き」や「佐渡鉱山における選鉱・精錬」についても興味ある史実を示しながら分かり易く説明された。

(文) 正木会員 (写真) 岩崎会員

出版案内

『岩倉使節団の再発見』

米欧回覧の会編

いよいよ思文閣出版から、国際シンポジウムの報告書が三月下旬に刊行される。(A五判・二百八十四頁)

思文閣出版のチラシ草稿

には「・・・近代的国家の建設をめざし明治四年から六年にかけて実行された世界周遊

英訳実記『The Iwakura Embassy』を読む会がスタート

懸案だった『米欧回覧実記』の英訳“The Iwakura Embassy 1871-73”(全5巻)を読む会が、いよいよ今年からスタートすることになり、第1回が1月16日(木)如水会館で、第2回が2月13日(木)国際文化会館で開催された。

2回とも9名の会員が集り、チャプター1の横浜港出発から始めて、チャプター3のサンフランシスコまで読み進んでいる。漢文調で難解な久米の美文をよくも翻訳して『実記』を国際化してくれたとその労苦に頭が下がる。新事実を含む注記も貴重である。また、原文にある格調や香りをどう旨く英語で表現しているかも含めて翻訳の適否や正誤を検証したり、読書会の進め方も含めて喧喧諤諤、あっと云う間に2時間半が過ぎてしまっている。

第3回は<催し案内>(P8)の通り開催の予定。若い英国人留学生も加えて、益々賑やかになりそうな気配。興味ある方は世話人までご連絡下さい。

なお、この読書会の運営方針等については昨年の暮れに発起人が集まって協議して、以下の大枠を暫定的に決めたが、「走りながら考えよう」と気楽にスタートしている。ご意見賜れば幸甚である。

- ①新年から毎月第3木曜の夕刻に開催すること
- ②初年度はアメリカをテーマにすること
- ③注記も含めて音読の上報告・意見交換すること
- ④若手・外国人も勧誘すること
- ④原著や現代語訳との対比もしよう等

世話人 岩崎洋三 (Yozo Iwasaki)
zaa96087@oak.zero.ad.jp

*第3回(3月20日)の読書範囲の予定
Ch.4 A Record of The City of San Francisco.2
~ A Record of The Railroad Journey in The
State of California) p.81 ~ 103
(一人本文約2ページと該当脚注を予習し、当日音読・報告。脚注は日本語訳を準備します。)



第1回の英訳実記を読む会

『舞踏への勧誘』

山川捨松、津田梅子とともに岩倉使節団同行の女子留学生の一人、永井繁子の伝記が

視察団「岩倉使節団」の全容と現在の研究状況を第一線の研究者がわかりやすく論じた「好書」とある。定価三千六百元、会員への特別頒布価格は三千円、送料四百円の予定。詳細は改めてご案内します。



文芸社から三月に出版される。永井繁子はヴァッサー・カレッジ音楽専門学校を卒業し、明治日本の音楽教育に尽力した。著者は生田澄江氏、本体価格千六百元。

現未来部会の現況

連絡 塚本弘

Tel 03-3211-2765 Fax 03-3213-1371

h-tsukamoto@jeita.or.jp



例会報告

二月五日、「日本経済の再生をどうするか」デフレ対策優先か、構造改革重視か」をテーマに開催。塚本氏がダボス会議のエピソードも交えて「日本経済の課題と将来展望」と題したコンパクトなレジュメと資料で、手際よく日本経済が抱える課題と処方箋を解説した。この十年間の経済低迷の主な理由は、バブル崩壊にあると明言。それに政府の経済政策のまずさが輪をかけ、加えてグローバルな競争において日本企業勢の弱体化が目立ち混迷の色を濃くしている。今後なすべきことは、先ず不良債権問題の解決に全力で取り組むこと。次に日本の潜在力を引き出し活性化すること。そして国のあり方を国から地方へ、官から民へ、事前規制から事後審査へ変え、国家構造を発展途上型から豊かな社会型への転換を目指す。成功の鍵はアイデアの執行であると結んだ。報告を受けて、いつもの通り活発な意見交換が行われた。(文) 小田会員

関西支部の現況

連絡 山崎岳麿

Tel&Fax 06-6853-3137

takechan@tcct.zaq.ne.jp



例会報告

二月十四日、参加は十六名で会場一杯になった。霊山博物館で秋に岩倉具視の特別展があるとの連絡があり、それと関連付けて合同の企画を考えたという報告。その後、国際シンポジウムのビデオを見る。これほど多くの人が集り、読みにくいこの本を読んでいる外国人の人がいるのかと、「米欧回覧実記」の魅力を再認識しつつ見た。『実記』のスイスについての概論を読む。次にジュネーブの自治体の制度。ここでスイスは豊かで、しっかりした国と思っていたが、大統領が一年交代で、強いリーダーがいけない、何を決めるにも時間がかかるという。どうしてここに世界中の金が集まるのだろうかの発言。收拾つかぬまま、風景観光へ移る。既に各国から観光客があることを知り、リギ山登山鉄道の完成式に誘われての観光旅行の部分、漢詩まで引いての風景描写の名文を読む。皆さん博学多識で、あつという間に五時となる。(文) 山崎会員

「米欧回覧の会」ご案内

趣旨 この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。

会員 上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例会 年に4回くらい全体例会をもちます。

分科会 テーマ別にグループ活動をします。映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなど。

機関紙 年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

幹事 会員の中から、代表1名、幹事十数名を選び、運営を担当します。

会費 年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・分科会・講演会などについては、その都度の会費とします。

事務局 当面「イズミ・オフィス」に置きます。
〒192-0063 八王子市元横山町1-14-16
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:0426-46-3310
FAX:0426-45-8700

入会申込

氏名・連絡先(自宅或いは勤務先の住所・TEL・FAX)現職&キャリアを事務局までFAXまたは郵便でお送りください。なお年会費は郵便振込が便利です。

00180-2-580729 米欧回覧の会

<催し案内>

2003年3月~4月の予定です

☆4月全体例会

日時：4月19日(土) 12:30~16:30
場所：日本プレスセンター10階ホール
講師：高田誠二氏(北大名誉教授、久米美術館研究員)
テーマ：近習から科学技術レポーターへ
—久米邦武の成熟
(内容、会費、二次会など詳細は改めて案内します)

☆実記を読む会

日時：4月3日(木) コンgress、黒人問題等
5月8日(木) 郵便制度、農業、女性
場所：いずれも
南青山クラウンインターチェンジ内サロン
電話 03-5469-2090

☆英訳実記を読む会

日時：3月20日(木) 18:30~21:00
場所：国際文化会館 Aセミナー室
会費：1000円(食事・飲物はできません)
世話人 岩崎洋三 zaa96087@oak.zero.ad.jp

☆現未来部会

日時：4月4日(金) 18:30~21:00
場所：国際文化会館
テーマ：イラク・北朝鮮問題への日本外交のあり方を考える
会費：1000円
申込みは担当幹事または事務局まで

☆関西支部例会

日時：5月22日(木)
場所：大阪凌霜クラブ会議室
問い合わせは、
山崎岳磨 (Tel&Fax 06-6853-3137)



.....ホームページのご案内.....

- ◇米欧回覧ニュース第1号からのバックナンバー
- ◇会の催し・部会活動の速報
- ◇<群像>岩倉使節団とその周辺(パネル30枚)
- ◇インターネットサロン(会議室) など

* 皆様のご意見をお聞かせ下さい
(ホームページ編集に関心のある方歓迎します)

<http://www.iwakura-mission.jp>

◇「ボンケ」以外の酒類は、キャッシュユパーで提供する方式を今回初めて試みています。人によって異なる適量に依ることができ、全体の会費を抑え、予算計画も立てやすくなります。また、多種のお酒を用意することができ、選択の幅も広がる、利点の多い方式です。

◇無理のない範囲で活動を行うのが任意団体の姿ですが、「身のほど知らず」の事業に挑戦し、実現させてしまおうのが当会の魅力の一つとなっています。しかし、現在進行している出版、スライドのビデオ化を始める為には、会員増による「身のほど」の強化も必要です。講演やツアーなど入り口は多様です。関心のありそうな方をお誘いください。(N)

編集後記

◇新年懇親全体例会のウェルカムドリンクは、西洋暦の新年を祝う船上の夜会で使節団が味わった、「シャンパン、ブラデー」他各種「酒ヲ和シ」た「ボンケ」に近づけるべく幹事の山田氏が苦心した飲物です。岩倉使節団が体験した一八七二年の新年の味を共有できたでしょうか。